令和８年度第２回岐阜県ＤＸ推進戦略会議
議事要旨

１　日時
令和８年８月４日（火）９：３０～１１：００

２　場所
岐阜県庁２０階　会議室２００４

３　出席者
配席のとおり

４　議事概要
＜議題＞

次期岐阜県DX推進計画(仮称)の策定について

〇松島座長（ぎふDX支援センター長・(公財）ソフトピアジャパン理事長）
・読める未来と読めない未来を組み合わせながら、効果的に推進することが必要。
・KPIの設定に当たっては、KPIの達成が目標化しないような設定が必要。
・防災では「あそこにあのおばあちゃんいたよね」といった情報も大事で、窓口に来なくなり誰がどこにいるか分からないことは避けなければならない。必要なサービスがどうあるべきか、このあたりのバランスも問われている。

〇浦田委員（名古屋大学大学院情報学研究科教授）
・業務へのAI活用について、自治体間での格差が出てきている。
・(現行計画16分野の再編に関し）県民目線での分かりやすさを重視した構成とすることが重要である。
・目標や方向性について、変化の激しい分野なので、常に見直しができるような柔軟な進め方が重要。

〇大野委員（(株）大野ナイフ製作所 常務取締役）
・利便性を向上させるには、ユーザーがシステムづくりに関与することが最も効果的であることから、一定の内製化は重要。
・小規模な事業者には、伴走支援や好事例の横展開といった施策が有効。

〇加藤委員（岐阜大学教授・同大学人工知能研究推進センター長）
・AIエージェントにより外注は不要になりつつある一方で、デザインやアプリの使い勝手などの部分では、まだ人間の経験が必要であり、勝負が出来る。

・KPI は導入数ではなく活用が目的の指標を設定すべき。例えば、SNS の 100 万件いいね、など。変化が目まぐるしい AI 分野で KPI を設定するのは難しい。

〇辻委員（（一社）岐阜県情報産業協会会長／（株）インフォファーム代表取締役会長）
・ソフトピアジャパン、市町村行政情報センターといった本県独自の強みを生かしてほしい。岐大とソフトピアが組んで、AI 活用日本一など高い目標を目指してほしい。

〇長尾委員（下呂市最高デジタル責任者（CDO）補佐官）
・DX というと危機感からの生存戦略と捉えがちだが、「ワクワク」に向けた前向きな計画とするべきと考える。
・市町村の窓口＝単なる手続の処理場所というイメージがあるが、住民の困りごとと向き合う、対話をするといった場が未来の窓口の姿ではないか。
・市町村へは、人的リソースや、現場に直接入るプロジェクト単位の支援も必要。

〇林委員（(一社）岐阜工業会会長・DAISEN（株）代表取締役社長）
・設計業務なども大きく変わってきている。採用から数年程度の職員に任せている業務が、無くなってしまう時代になるのではないか。その中でも、AI が作ったものを監査する技能が必要。

〇藤吉委員（中部大学教授・同大学 AI 数理ﾃﾞｰﾀｻｲｴﾝｽｾﾝﾀｰ副ｾﾝﾀｰ長・
（一社）日本ﾃﾞｨｰﾌﾟﾗｰﾆﾝｸﾞ協会理事）
・AI エージェント等の活用では、人間の承認、判断が求められ、経験がものを言う時代になる。ベテラン世代の方がうまく使いこなせるかもしれない。
・教育に AI を使うと、「学び」のショートカットになってしまう恐れがある。経験を積ませる、失敗ができる環境を作ることが重要である。
・AI エージェントを使う際、DIY 精神のような、自分たちが使いやすいように作り込める仕組みが必要。それが「ワクワク」に繋がっていくと思う。

〇山内委員（笠松町企画環境経済部長兼企画 DX 課長）
・骨子案の記載内容は、体系的な支援の構築が求められており、県による継続的な取組が必要。
・県の主導による、圏域を越えた先進事例の情報共有の場なども非常に有益。

〇吉田委員（ぎふの木ネット協議会事務局／ヤマガタヤ産業（株）取締役）
・教育委員の立場から、教科書のデジタル化では探求学習にはつながる面もあるが、デメリットもあるので、特に低年齢の生徒にはより慎重な視点が必要。
・30 年後の世界的な水不足・食料不足を想定すると、岐阜県の豊富な森林資源・水資源と DX・AI を結びつけた「岐阜県らしい DX」 を目指すことが重要。